まえがき

松崎正治（同志社女子大学）

澤田英史さんが二〇一五年九月一三日に亡くなられた。一九五〇年一〇月一一日に生まれた澤田さんは、享年六四歳であった。

澤田さんは、兵庫県立高校に在職中の一九八八年度（三八歳）から二年間、神戸大学大学院教育学研究科で、浜本純逸先生に学ばれた。その時以降、浜本純逸先生主宰の〈国語教育の理論と実践〉を学び合う両輪の会で、切磋琢磨し合った同人が、澤田さんの遺徳を顕彰して、この冊子を作ることにした。

本冊子は、まず、澤田英史さんの人生と著作をたどる。

次に、「読むいか通信」、「枠組み作文」等、多くの人に影響を与える実践を創造された澤田さんの国語教育理論と実践の意義を明らかにする。

さらに、三九歳から本格的に創作されるようになった短歌も、きわめて重要である。歌人としての沢田英史の作品を読み解いていく。

最後に、澤田さんと交流のあった方々に、澤田さんの思い出を語っていただく。

このような構成で、澤田さんを偲びたい。

ところで、亡くなられる一年弱前の文章に次のようなものがある。

「でも、ほんとうに、なぜ歌をつくるんだろうね。……」

「……何かを創り出すこと。たしかに、これほど人にとって喜ばしいことはないね。あらゆるものを無化しようとする大きな時の流れ、それにあらがってたとえわずかでも自己の生きた証をとどめようとするのは、大切なことにちがいない。」……

「創造の喜びとはただ作るだけにとどまらず、作り上げたものが享受され、共感をかちえることによって完結すると言えるんじゃないのかな。」

（沢田英史「歌をよむって」・『ポトナム』二〇一四年六月号　六二～六三頁）

澤田さん、あなたの国語教育の理論と実践、短歌は、時を超えて、共感をかちえて残っていきますよ。

「かならずやさわだえしは不死鳥のごとくよみがえるこの冬越して」

（『ポトナム』二〇一四年三月号）